

梅雨明け後の高温と干ばつへの対策について

県北農林事務所経営・普及部門

●気象情報

2023年7月13日14時30分 気象庁発表の関東甲信地方1か月予報(7/15~8/14)によると、気温が高い状態が続く見込みのため、農作物の管理等に注意してください。また、熱中症の危険性も高まりますので、農作業時の健康管理に注意してください。

●対策技術

I 共通事項

- ・高温が続くことにより、農作物の生育が早まることが予想される場合は、作業計画の見直しや肥料・農薬等資材の確保に留意する。また、県病害虫防除所の病害虫発生予察情報の収集に努め、適時適切な防除を行う。

II 普通作

1 干ばつ対策

(1) 大豆

- ・干ばつにより出芽にばらつきがみられる場合、出芽が遅れた部分における雑草の多発が懸念されるので、茎葉処理剤を用いた体系処理を行う。雑草の生育が進むと除草剤の効果が劣るので、散布時期が遅れないように注意する。
- ・晴天が1週間程度続いて土が白く乾燥し、日中に大豆の葉が立って半分以上の葉の裏面が見えている場合、干ばつ被害を受ける可能性が高いため、かん水が可能なほ場では額縁明渠とほ場内の排水溝を通して朝夕の涼しい時間帯にかん水する。ただし、水が停滞すると湿害を生じるので、水が行き渡ったら速やかに排水する。
- ・暗渠が施工されているほ場では、水甲を閉じて地下水位の低下を防ぐ。
- ・ハダニ類、アブラムシ類等の高温乾燥時に発生が多くなる傾向の病害虫については、発生動向に十分注意し、初期防除に努める。

2 高温対策

(1) 水稲

- ・斑点米カメムシ類の発生が増加する恐れがあるため、出穂期~穂揃期に多数の斑点米カメムシ類を認めた場合は防除を実施する。防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。

- ・高温登熟による乳白粒、胴割粒、白米ひび割れ粒の発生を防止するため、出穂期後 30 日間は落水を避け、間断かんがいを徹底する。特に、出穂後の最低気温が 25℃を上回る、いわゆる熱帯夜が続く場合は、用水が十分に確保できる場所では、夜間のかげ流しを行い、夜温の低下に努める。
- ・暗渠施工田では、1 日当たりの減水深が 20mm 程度になるよう水甲を調節する。また、減水深が小さいほ場や降雨などで湛水状態が継続する場合は、排水して間断かんがいに努める。
- ・登熟初期（出穂後 10 日間）が高温で経過した場合、収穫時期が遅れると胴割粒が顕著に増加する。そのため、収穫作業の計画を立てるとともに適期収穫に努める。収穫適期は、帯緑率 10% 程度の時から、早・中生品種が 5 日間、晩生種で 10 日間である。

Ⅲ 野菜

1 干ばつ対策

- ・干ばつ傾向にある地域においては、土壌の保水力を高め、また、根を深く張らせるために、作付け前には深耕、有機物の投入等に努める（有機物投入の際は定植・播種までに十分期間がとれるように注意）。さらに、マルチ等により土壌表面からの水分の蒸発防止に努める。
- ・ハダニ類、アブラムシ類等の高温乾燥時に発生が多くなる傾向の病害虫については、その発生動向に十分注意し、初期防除に努める。
- ・果菜類では、しおれの予防ため、根域への少量・多回数のかん水が有効である。晴天日は、特に早朝からかん水を行う。定植直後の場合は、かん水場所に留意し、特に株元に水が行きわたるよう留意する。
- ・カンショ等の露地作物では、灌漑施設がある場合は、スプリンクラーや導水ホース・灌水チューブを利用するなどして、積極的にかん水を行う。
- ・葉茎菜類では、吸水不足によるチップバーンを防止するため、薬剤防除時にカルシウム剤を混用する。

2 高温対策

(1) 全般

- ・かん水は、時間帯に注意し、特に高温が予報される日は涼しい時間帯の早朝・夕方に実施する。
- ・施設内のかん水は、湿度が高くなりやすいため、夜間や曇雨天時は、循環扇を使用するなどして湿度を下げる。循環扇は、局所的な高湿空気の滞留を防ぎ、室内温度の均一化に効果的である。
- ・地温上昇の抑制や土壌水分の保持を図るため、適宜、地温抑制マルチや敷わら等を活用する。
- ・曇雨天後に、急に晴れて高温強日射にさらされる日は、特に萎凋しやすいため、早朝にかん水を行うとともに、特に萎れる場合は葉水の実施により葉の焼けを防ぐ。
- ・施設では、ハウス内の温度上昇を抑制するため、妻面・側面または天窓を開放するとともに、屋根面に塗布剤や遮光資材等を使用し、ハウス内気温、葉温、果実温の上昇を抑制する。さらに、換気扇や細霧冷房などにより、適切な温湿度の管理に努める。

- ・こまめな除草や側枝、弱小枝及び下葉を除去し、ほ場の通気性を良くする。
- ・苗床は、コンテナなどによる育苗箱のかさ上げや苗の間隔を十分に広げるなど、通気性を良くする。
- ・薬剤散布を行う際は、高温時の日中は、薬害を生じやすいので、早朝や夕方など涼しい時間帯に行う。着果促進のための植物調整剤の処理も同様である。
- ・軟弱に生育している作物は薬害を生じやすいので、薬剤散布を行う際は使用基準の範囲内で散布濃度を低めにする。

(2) 果菜類

- ・樹勢維持のため、不良果の摘果、早めの収穫により着果負担の軽減を図り、適切なかん水・施肥を行う。
- ・老化葉、黄色葉を中心に適切に摘葉し、水分の過剰な蒸散や呼吸の抑制に努める。
- ・強日射により果実表面の温度が高くなりすぎると、トマトで裂果、着色不良果、軟化玉、ピーマンで日焼け果、ナスでつやなし果等が発生するため、適切な遮光とかん水に努める。
- ・収穫期のスイカやメロンにおいては、過熟とならぬよう試し切りにより果実品質を確認し、収穫時期に留意する。
- ・カルシウム欠乏、鉄欠乏、ホウ素欠乏等の生理障害対策として、必要に応じて葉面散布を行う。

(3) イチゴ（育苗期）

- ・高日射条件下の採苗は、こまめなかん水と十分な遮光により、苗の活着を促進させる。活着後も、こまめなかん水と適切な遮光、追肥管理により苗の充実を図る。チップバーンを発生させると苗質低下の要因となるため、かん水管理に特に注意する。
- ・高温下でかん水量が増加することで、炭疽病の発生が助長されやすくなるため、薬剤の予防散布に努める。

(4) ネギ

- ・高温条件下（気温30℃以上）では、土寄せ・追肥など根傷みにつながる作業はなるべく行わない。
- ・土寄せを行う場合は比較的涼しい日や時間帯を選び、通路一列おきに実施することで両側の根が一気に切られるのを防ぐ。土寄せを行わなかった列は5～7日程度後に改めて土寄せする。
- ・高温時に土壌水分が高いと軟腐病の発生が多くなるので注意する。発病が懸念されるほ場では予防的に薬剤防除を行う。また、発病株は伝染源となるので見つけ次第丁寧に抜き取り処分する。

(5) ニンジン

- ・35℃以上の高温下では極端に発芽が悪くなるため、高温乾燥が続く場合は播種・かん水を夕方に実施する。播種後4日程度で表土から2cmほど掘ったあたりが乾くようなら夕方にかん水を

行う。

- ・灌漑施設のないほ場では、覆土を1 cm程度に厚くして十分鎮圧する。
- ・8～10日たっても1本も発芽しない場合はまき直しを検討する。

(6) トウモロコシ

- ・収穫適期が早まり収穫遅れによるシナビの発生が懸念されるため、日当たりの良い場所から登熟具合をこまめに確認し、収穫時期に留意する。

IV 果樹

1 干ばつ対策

(1) 全般

- ・干ばつ傾向にある地域においては、用水の確保に努め、敷わら、敷草等により、土壌水分の蒸発を極力抑制しつつ、適宜かん水を実施する。
- ・草生栽培においては、干ばつ期の草刈りを実施する。
- ・かん水に当たっては、かん水設備の漏水、目詰まり等に留意し、適切に行えるよう事前に点検を行う。
- ・施設栽培では、施設内の温度上昇を抑制するため、妻面・側面または天窓を開放するとともに、循環扇等を利用し室内温度の均一化を図る。
- ・干ばつ時に発生し易いハダニ類については、発生動向に十分注意し、発生初期からの薬剤防除を実施する。
- ・薬剤散布を行う際は、高温時の日中は、薬害を生じやすいので、早朝や夕方など涼しい時間帯に行う。

2 高温対策

(1) ブドウ

- ・顆粒軟化期（ベレーゾン期）前の果房は、日やけ症、縮果症などの生理障害が発生しやすいので果房に傘かけ（紙製の傘）を行う。
- ・ブドウの根は浅いので、株元の根域への少量・多回数のかん水が有効である。晴れた日は、午前中に毎日かん水すると良い。
- ・ほ場の夜温を下げるため、夕方の散水も有効である。ただし、過散水は多湿となり病害発生を助長するので注意する。

V 花き

1 干ばつ対策

- ・干ばつ傾向にある地域の露地栽培の花きについては、土壌の保水力を高め、また、根を深く張らせるために、定植前には深耕、有機物の投入等に努める。さらに、マルチ等により土壌面からの蒸発

防止に努める。(有機物投入の際は定植までに十分期間がとれるように注意)

- ・ハダニ類、アブラムシ類等高温乾燥時に発生が多くなる病害虫については、その発生動向に十分注意し、適期初期防除に努める。

2 高温対策

- ・切り花については、朝・夕の気温の低い時間に採花し、常温で長時間放置しない。
- ・エチレンによる劣化を防ぐため前処理剤を使用し、品質の維持に努める。
- ・ハウス栽培の花きについては、ハウス内の温度上昇を抑制するため、妻面・側面を開放するとともに、遮光資材等を使用する。細霧冷房装置や換気装置の使用により適切な温度及び湿度の管理に努める。